

令和4年度

連携活動記録報告書

VOL. 13



令和5年3月

山形大学附属学校園

目次

はじめに	．．．．	1
I 連携活動の記録		
令和4年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題	．．．．	3
令和4年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題	．．．．	5
令和4年度の活動を振り返って	．．．．	6
1 幼小中連携		
（1）幼小連携	．．．．	12
（2）幼中連携	．．．．	17
（3）小中連携	．．．．	18
2 特別支援学校連携	．．．．	19
II 山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程	．．．．	26
III 資料		
附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める		
部会に関する申合せ	．．．．	30
山形大学附属学校研究・連携推進委員会委員名簿	．．．．	32

はじめに

山形大学附属学校園では、4校園相互の連携を強化し、校種間の円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行うことを目的として、「山形大学附属学校研究・連携推進委員会」の下に、「共同研究推進部会」・「幼・小・中連携部会」・「特別支援連携部会」の3つの部会を設置しています。本報告書は、令和4年度の「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の活動の記録をまとめたものです（なお、もう1つの「共同研究推進部会」の活動については『大学と附属学校園の共同研究報告書』としてまとめています）。

山形大学附属学校園では、子どもたちの交流活動や連絡会、研修会などを通じて、4校園の教員が互いの教育現場を参観し合い、意見や情報を交換しています。その中で、各校園の教育目標に応じた特徴を持つ教育実践に基づいて、附属学校園としての新たな連携の在り方を意識した教育方法の検討に取り組んでいます。また、山形大学附属学校園には、特別支援教育コーディネータとメンタルケア・コーディネータ（平成23年度から）及び英語教育コーディネータ（平成27年度から）が配置されており、「まつなみ学習支援室」（平成24年設置）とともに、4校園間が多面的に連携した教育支援を行ってきました。附属学校という特性を生かし、一貫した教育理念を反映した教育実践の追究に取り組んでいます。

山形大学附属学校園は、山形県教育委員会の「探究型学習推進プロジェクト」の推進協力校になっています。幼稚園での「遊び込む教育」が子どもたちの探究活動の基礎となり、小学校での探究的な学びにつながっていくと連続的に捉える必要があります。そして、小学校で育まれた地域に根ざした探究的な学びの姿勢が、中学校ではより広く世界に視野を広げつつ、自分が関心をもった対象を深く理解していく学習へと展開されることとなります。その先に、高等学校や大学を学びの場とする、主体的で探究的な学習者として成長していくことが期待されています。また、幼稚園から始まる共同生活が小学校、中学校と進む中で、困難を抱えがちな子どもたちの支援においても、インクルーシブ教育の観点から学校全体で子どもたちのより豊かな成長を促すようなしくみを構築することも求められています。

このような課題への取り組みは、公立学校のモデルとして全国の国立大学附属学校に要請されているものです。山形大学附属学校における連携活動が、単発的な活動に止まらず、一貫した教育理念に支えられた実質的なものになるよう、今後も4校園の連携の在り方を模索していくことが大切だと考えています。

本報告書をご高覧いただき、忌憚のないご意見やご要望をいただければ幸いです。

令和5（2023）年2月

山形大学附属学校運営部長 三浦 登志一

I 連携活動の記録

令和4年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 その1

附属小校長 林 敏幸

メンタルケアコーディネータ(中学校籍 教諭) 千葉 久美子
特別支援教育コーディネータ(特別支援学校籍 教諭) 藤本 沙織

1 配置のねらい

附属学校園の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

- ◇教育相談と特別支援教育にける校種間の連携及びその一貫性の推進
- ◇附属学校園で特別支援を必要とする幼児・児童・生徒への支援の充実と体制整備の推進
- ◇附属学校園で心の問題を抱える幼児・児童・生徒への支援の充実と体制整備の推進

2 主な職務

- ◇幼小連携、小中連携における継続した支援・指導の中核
- ◇該当する幼児・児童・生徒への直接の支援・指導
- ◇学級担任や教科担任、養護教諭への専門性を生かした支援
- ◇各校園の教育相談担当者・特別支援コーディネータ・養護教諭との連携
- ◇まつまみ支援室における支援員への専門的な助言及び教職員の資質向上を促す研修実施

3 今年度(配置12年目)の基本的な考え方

【目標】

- ◇早期支援の立場から幼稚園における支援や適正な就学指導に生かす機能強化を図る。
- ◇各学校園でコーディネータを積極的に活用した組織的な支援体制の充実を図る。
- ◇個に応じた支援のあり方(当該児童・生徒または保護者、担任支援も含む)を探究する。
- ◇年齢に応じた発達課題を整理し、幼から中までの12年間継続して課題解決を図る。
- ◇まつまみ学習支援室の支援員を中心に、別室での学習や取り出し指導の充実を図る。

【役割】

- ◇附属学校園の課題を把握し、各校園の担当者と一緒に校園間をつなぐ。
- ◇各校園の担当者と連携し、各校園の課題解決に向けて指導及び支援を行う。

【具体策】

- ◇各校園の状況を把握し、幼児・児童・生徒の情報をつなぎ、一貫性のある指導・支援を行う。
- ◇専門的な情報を収集・整理し、各校園の教員への情報提供及び研修等を通して指導する。

4 今年度の成果(○)と課題(▼)

- 保護者面談の計画的・継続的な実施、関係機関との連携窓口としての機能が定着してきた。
- コーディネータ及び支援員が幼稚園と小学校の両方に勤務し、幼児の実態把握と情報共有を丁寧に行うことで、幼・小をつなぐ指導・支援のあり方について連携することができた。
- 指導対象の幼児・児童・生徒について、特別支援教育コーディネータが WISC-IVの実施や分析も含めたアセスメントを行うことで、個に応じたよりの確な支援を行うことができた。
- 学級担任と日常的に情報共有を行い、継続的な支援を必要とする場合は、ソーシャルスキルトレーニング(SST)等を計画的に実施することができた。
- 状況に応じてコーディネータやSCも含めたケース会議を適時開催することで、迅速かつ的確な情報共有が図られ、早期対応につなげることができた。
- 教育課程説明会等において、まつまみ支援室の機能について説明を重ねてきたことで、保護者の理解が広がり、相談を受ける機会が増えてきている。
- ▼特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への対応等について、コーディネータを中心に事例を基にした研修を今後も行い、教員の資質・能力向上を図っていく。

令和4年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 その2

附属小校長 林 敏幸

英語教育コーディネータ(附属小学校籍 教諭) 佐藤 大将

1 配置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

- ◇グローバル化に対応した教育環境づくりの推進として、小学校における英語教育の充実強化、中学校における英語教育の高度化に対応する。
- ◇附属学校園全体の英語教育における幼児・児童・生徒への支援と英語教育の体制整備、推進、充実を図る。
- ◇異学校種間の英語教育のあり方に関し、地域のモデルとなる実践を行い、その周知を図る。

2 主な職務

- ◇附属学校全体の英語教育における幼児・児童・生徒への支援・指導の充実に向けて大学教官と連携を図り、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
- ◇小学校での外国語科及び外国語活動の授業において、担任と連携した指導、補助を行う。
- ◇英語教育の充実、強化・高度化に対応した指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
- ◇附属学校全体の英語教育とその支援・指導を行う教員として、幼小中一貫教育を支える。
- ◇附属幼稚園での英語遊び等を試行し、幼小連携による具体的な実践を促進する。
- ◇大学・学部等での研修を積極的に行い、英語教育コーディネータとしての資質向上を図る。

3 今年度(配置8年目)の基本的な考え方

【目標】

- ◇学習指導要領に基づく外国語科及び外国語活動の指導充実と年間指導計画の策定・更新
- ◇附属中学校の英語科と小学校の外国語科及び外国語活動の接続に資する連携強化

【役割】

- ◇学級担任や ALT と連携し、外国語科及び外国語活動の時間を受け持ち、その充実を図る。
- ◇県や市の研修の講師として、地域の小学校の研究会・研修会等において指導・助言を行う。
- ◇附属幼稚園および附属小学校低学年の英語遊びの指導
- ◇附属中学校英語科の授業づくりへの支援(TTでの授業参加)
- ◇附属小学校外国語科及び外国語活動への附中英語科教員の参加をコーディネートする。

【具体策】

- ◇6学年における外国語科(週6コマ)を担当する。
- ◇1・2学年における英語遊びを複数回担当する。
- ◇附属幼稚園における年長児の英語遊びを複数回担当する。
- ◇学習指導研究協議会等において、外国語科及び外国語活動の授業を提案する。
- ◇研修や参観した公開授業等の情報を整理し、校内研修会等で報告する。

4 今年度の成果(○)と課題(▼)

- 年間指導計画に基づき、PDCAを意識して加筆修正しながら改善を進めるとともに、幼小中の12年間を見通したカリキュラムの構築に向けた実践を推進することができた。
- 学習指導研究協議会では、動画配信や Web 会議システムを活用した授業提案を行うことで、小学校外国語科のモデル実践を幅広く県内外に発信することができた。また、参集型で実施した秋の研究協議会では、指導力を高めるための具体例を示すことができた。
- 英語遊びの実践を通じて、幼から小(低学年)の連携モデルの構築を進めることができた。
- 学習アプリや動画撮影機能等の ICT を効果的に活用した授業づくりを進めることができた。
- ▼子ども同士がつながる小中連携の学習内容を構想し、実践したことを発信していく。

令和4年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題

附属小校長 林 敏幸

1 設置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

- ◇附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児・児童・生徒への支援充実と体制整備の推進を図る。
- ◇附属学校園の特別支援教育並びに教育相談機能の一層の充実と活用を図る。
- ◇県内小学校の発達障がい児等通級加配校のモデルとなる研究・実践を積み重ねる。

2 主な職務

学級担任、各コーディネータ、SC(必要に応じて、中学校のSC及び大学の心理教育相談室のスーパーバイザー)、管理職(校長・教頭)と連携して主に以下の職務を行う。

- ◇学習面、生活面での支援(行動観察、TT指導、取り出し個別指導、諸検査の実施)
- ◇メンタル面での支援(教育相談、アドバイス等)
- ◇保護者との面談、教育相談
- ◇研修会等の周知・啓発活動の計画・実施

3 支援室の運営

- 【室長】 小学校まつなみ支援室長 長岡 初美 教諭(附属小学校在籍)
- 【副室長】 特別支援教育コーディネータ 藤本 沙織 教諭(附属特別支援学校在籍)
- 【メンタルケアコーディネータ】 千葉 久美子 養護教諭(附属中学校在籍)
- 【支援員】 小学校まつなみ支援室支援員 小林 明日香 支援員(週5日5h勤務)
- 【スーパーバイザー】 佐藤 宏平氏(山形大学地域教育文化学部准教授)

4 今年度の成果(○)と課題(▼)

- 附属学校園間の情報共有が迅速かつ的確に図られ、特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への継続的な支援が充実した。
- 心理検査等による客観的なデータ等を活用し、専門的な視点から支援を行うことができた。
- 幼稚園児と小学校低学年への早期発達支援及び支援員の幼児・児童への個別的・計画的・継続的支援が有効に機能した。
- 室長とコーディネータ、支援員が日常的に情報交換を行うことで、必要な支援を迅速に行うことができた。
- 個別の指導計画及び保護者の了解を得た教育支援計画に基づいて支援を行い、本人及び保護者の安心感・信頼感の醸成につながっている。
- 附属学校園教員の特別支援教育についての理解が深まり、各学年・学級において特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への対応力が向上している。また、教員が必要なときに相談したり、組織的に支援を行ったりすることで、教員の安心感や心の安定につながっている。
- 来室時に限らず、教室や園に出向いて観察や支援を行うことでより多くの情報収集ができ、支援の幅を広げることができた。
- ▼支援を必要とする幼児・児童・生徒に対して、切れ目のない一貫した支援ができるよう、幼・小・中での日常的な観察を基盤とした情報共有を一層強化していく。
- ▼幼児・児童・生徒が学校園において安定した生活を送ることができるよう、保護者の困り感に対応した教育相談をより充実させていく。

令和4年度の活動を振り返って

メンタルケアコーディネータ 千葉 久美子

1. 活動報告

(1) 特別支援教育コーディネータ及び附属小学校の教育相談担当との連携

- ・新入生の小学校時の生活の様子や人間関係、これまで行ってきた支援について情報提供をいただいた。
- ・小中学校に兄弟姉妹が在籍している生徒について必要に応じて情報交換を行った。
- ・中学校の生徒の様子についても情報提供を行った。

(2) 附属幼稚園との連携

附属幼稚園養護教諭と情報共有したり、週2回幼稚園で勤務している支援員から情報を得たりして連携を行った。

(3) 中学校スクールカウンセラーとの連携

- ・カウンセリング後、相談者から了解を得た内容を聞き取り、担任に伝達した。
- ・4月に中学1年生を対象にスクリーニングを実施。授業中の生徒の様子を観察し、生徒への支援方法について助言をいただいた。
- ・2名のカウンセラーからそれぞれ、1クラスずつ講話をしていただいた。内容は「ふれあいを通してクラスの親和性を高める」、「思春期の心について」、「ネットとの付き合い方」、「受験期の心の整え方」等
- ・Q-Uアンケートの分析の学年会に入って頂き、捉え方や支援についてアドバイスを頂いた。
- ・個別の教育支援計画等について内容や書き方等について助言を頂いた。

(4) 中学校の学級担任・教科担任との連携

- ・「スズキ校務」を活用し、その都度生徒の様子やカウンセリングの内容を記録し、担任や学年担任団に情報提供した。
- ・担任、学年担任団との情報交換を積極的に行い、今後の対応について検討した。状況に応じて校長や教頭に報告し、SCに繋いだりケース会議を開いたりした。
- ・担任会に参加し、Q-U結果を基に生徒の支援策について検討した。
- ・学級全体や特別な支援が必要な生徒への支援方法について確認し、指導にあたった。
- ・学習室の生徒のために授業内容や学習支援について確認したり、授業に出られるような対応策を検討したりするなどした。
- ・教育相談アンケートを受けて、生徒の面談を行った。

(5) 教育相談部会の実施(中学校)

- ・年度当初に教育相談の年間計画を作成し、教育相談アンケートのみならずSC講話やエンカウンター(SGE)、ソーシャルスキルトレーニング(SST)なども計画的に実施できるようにした。

- ・部会を月2回設け、生徒の情報交換を行い、必要に応じて支援策の検討を行った。
- ・教育相談アンケートを年5回実施し、生徒の現在の状況や悩みなどを把握し、面談等で対応するようにした。
- ・Q-U検査を年2回実施し、Q-Uの結果を受けて分析方法を提供し、個々の対応について検討した。
- ・全職員を対象に生徒理解研修会を実施し、今年度はS Cの佐藤恭子先生から、「発達障害とその傾向がある生徒たちへの対応」についての講話をして頂いた。

(6) 不登校生への対応（中学校）

- ・ケース会議を実施し、生徒の状況把握と対応策の検討を行った。
- ・担任から家庭訪問や電話での様子を聞き、対応策を検討した。

(7) 学習室で過ごす生徒への対応（中学校）

- ・個別に月目標や具体的な取り組みを確認し、毎週、時間割を作成して目標に向かって学習できるように環境を整えた。
- ・必要に応じて生徒と面談を行い、心配事や困り事がないか確認しながら、適宜対応した。
- ・学習室で過ごす生徒が授業に入れるように教科担任と連携して学習支援を行うと共に、S G E、S S Tを行い、人との関わり方について学ぶ機会を取り入れた。
- ・I C Tを活用して生徒が学習室にいても授業に参加できるように環境を整えた。
- ・進路学習として、夏休み中、学習室の生徒と保護者を対象に不登校経験のある卒業生との交流を行った。

2. 成果と課題（成果○、課題△）

- 小学校からの情報提供を基に、特別な支援が必要な児童の様子やその支援策について、児童理解に努めることができた。
- 小中学校でつながりのある支援になるよう、特別な支援が必要な児童の保護者を対象に中学校の養護教諭と共に春休みに面談を行い、中学校進学に伴う心配事や困り事を聞いたり中学校への要望などを確認したりした。その後、面談内容について1学年の担任会で報告し、新入生の情報を繋ぐことができた。
- 中学校ではI C Tを活用して不登校生徒や学習室の生徒が授業や行事に参加することが可能となった。今後も担任や教科担任と連携して情報環境作りに努めていきたい。
- 不登校経験のある卒業生との交流は今後の進路選択の参考になり、特に保護者に好評であった。
- △中学校の学習室を利用する生徒が増加したことで、生徒一人一人の学習進度や情報把握が煩雑になり十分に対応できないこともあった。また、生徒の引き継ぎファイルを活用しているものの、それだけでは不十分な時もあった。今後、生徒一人一人が安心して学習室で過ごすことができたり、教室復帰につながったりできるよう、学習室に専属で担当者がいることが望ましいと考える。
- △小中学校のつながりのある支援をより一層充実させていく必要がある。高学年の児童と関わる機会を増やすことで児童理解を深め、児童が中学校に進学した際、少しでも安心して学校生活を送れるように支援体制を整えていきたい。

令和4年度の活動を振り返って

附属学校特別支援教育コーディネータ 藤本沙織

1 主な活動の報告

(1) 教育的支援

今年度は、幼稚園、小学校において、学級や個人に対する教育的支援を行った。

幼稚園では、特に年中の学級に入り、気持ちの切り替えや友達との関わりに課題がある幼児を中心に支援を行った。今やることやゴール、終わりの時間を視覚的に提示したり、集中できる環境を整備したりすることで、自分の身の回りのことに自分で取り組んだり、気持ちを切り替えて、学年の活動に取り組んだりすることができるように支援してきた。友達といざこざになった際は、お互いの気持ちを伝え合う場面を設定し、適切な言葉で伝えられるように支援した。担任や養護教諭と、各活動における個別の目標とする姿、そのための支援について、情報交換を行ってきたことで、みんなが同じ視点で支援を行うことができた。

小学校では、支援が必要な児童について、それぞれの方法で支援を行ってきた。

教室での学習が難しい児童については、安心して過ごせる場として、まっなみ支援室に登校するようにした。支援員やコーディネータが、じっくり話を聞いたり、好きなことに取り組んでリラックスする時間を設けたり、別室での学習で個別に指導したりしてきたことで、安心して登校できる日も増えている。また、その日の時間割を見て、本人と学習の場を選択するようにしてきたことで、「この時間は行きたい。」という意思を伝え、学級での授業や給食に取り組むことも増えている。

学習上の困難が見られる児童については、担任と相談し、特に国語や算数の時間を中心にサポートに入るようにした。必要な児童については、WISC-IVの知能検査を実施し、その結果をもとに、担任、保護者と支援方法を共有しながら、支援を行っている。

その他は、全体を巡回する時間を設け、授業の様子を見て、気になる児童について、担任と情報交換を行い、支援の方法について、一緒に考えるようにした。

まっなみ支援室において、個別の指導も行ってきた。SST（ソーシャルスキルトレーニング）を行っている児童は、対人関係や社会生活を営むための技能について、年間計画を作成して、定期的に取り組んだ。また、不安感が強い児童について、放課後の時間を活用し、定期的には話を聞く時間を設け、課題解決に向けて話し合った。算数について特に難しさを感じている児童については、トランプやすごろく、タングラムで数や簡単な足し算、形に触れ、数の概念や形の基礎につながる活動を行ってきた。

(2) ケース会や情報共有

幼稚園では、担任が課題を感じている幼児についてのケース会に参加し、長期目標やそれに向けての具体的な短期目標、支援方法について一緒に考えてきた。また、定期的に関われる「子どもを語る会」にも参加し、幼児の成長や課題を把握することができた。

小学校では、まっなみ支援室職員や担任が課題を感じている児童について、管理職や養護教諭等とケース会を行い、実態を共有し、支援方法について相談してきた。学級、

保健室とも連携しながら、支援方法について相談することができた。個別の教育支援計画作成時は、担任とまつなみ支援室職員と一緒に課題を整理し、支援方法や合理的配慮について、話し合うことができた。

(3) まつなみ学習支援室および支援員等との連携

幼稚園の保育支援は、支援員と中学校講師、附属学校特別支援教育コーディネータ3名が交代で勤務しながら行っている。支援員、中学校講師の勤務日に、コーディネータが出勤し、支援について共有する時間を設けた。

小学校においては、支援員と附属学校特別支援教育コーディネータが交代で勤務している。週に1回は2人が一緒に勤務し、日々の情報交換を行っている。加えて、今年度より、まつなみ支援室への登校を行っている児童についての記録を付け、その子の状態の変化や学習への取り組みの傾向を把握し、指導・支援に活かすことができている。学校全体については、附属学校特別支援教育コーディネータや支援員が決まった時間にサポートに入ることができるよう、時間割を作成して教職員へ伝えており、担任はそれを見ながら、巡回時に気になる児童を見てほしいと声をかけてくださっている。また、必要に応じて、スクールカウンセラーに相談し、児童の様子を見ていただきながら、アドバイスをいただけたことは、とても有意義だった。

(4) 保護者支援

幼稚園は、1月に「小学校入学を見据えた子育て」というテーマで、年中児の保護者に向けてお話をさせていただいた。幼稚園での年中児の様子と、小学校1年生の姿の両方を見ている立場として、これから身に付けたい力、そのための支援についてお話しすることができた。個別の支援が必要な幼児については、面談に参加し、家庭での困り感の聞き取り、幼稚園での具体的な支援方法の情報共有、関係機関の紹介などを行った。

小学校では、個別の教育支援計画を作成している児童については、個別面談にも参加させていただいた。本人の思い、保護者の願い、担任の願いを確認することで、課題を整理し、支援方法や合理的配慮について、それぞれの思いをすりあわせ、合意形成を行うことができた。

2 今後の取り組みと課題

(1) 幼稚園と小学校の連携は、これまでも連絡会などを通して行われてきた。年長児がスムーズに小学校生活に慣れていけるよう、配慮の必要な幼児の実態やこれまでの経過等を情報共有するのは大切なことである。コーディネータが実際に学級に入りながら幼児と関わり、担任との課題整理や小学校への引き継ぎを行っていくことが大切と考える。

(2) 小学校の児童の様子から、個々の多様性に今後どのように配慮し、支援していくのかについて、情報共有しながら明確にしていくことが課題であると思われる。学習、対人関係への困難さを感じている児童に対して、個々の思いを大切にしながらも、学力や社会でうまく関わっていくための社会的スキルを、具体的にどこまで求めていくのか、本人、学校、保護者が共に考えていくことが必要であると考えられる。

今年度の活動を振り返って

英語教育コーディネーター 佐藤 大将

1 今年度の活動の報告

(1) 小学5・6年生における「外国語科」の授業

今年度も、「外国語を通じて、自ら関わりながら相手や他者とつながろうとする子ども」の育成を目指し、子どもにとってコミュニケーションを図る必要感のある目的・場面・状況の設定について、新たな可能性を模索してきた。

6年生では、一人一台端末を活用し、ALTのポール先生に自己紹介動画メッセージを送るという実践を行った。相手に自分のことを知ってもらうために、話す内容や伝え方を思考錯誤しながら、必要な語彙や表現を主体的に学ぶ姿が見られた。6月に行われた附属小学校の学習指導研究協議会では、この単元の授業の様子を動画配信し、県内外の参会者に本校の取り組みを発信することができた。



(2) 小学3・4年生における「外国語活動」の授業

今年度も、文部科学省作成の副読本「Let's Try!①②」を主な教材として扱いながら、「聞く」「話す」活動を中心に学習を進めてきた。5・6年外国語科、中学校英語科との系統性を意識しながら、コミュニケーション能力の素地を養うために、様々な言語活動に取り組んだ。

4年生では、山形大学の留学生に、自分のお気に入りの山形の食べ物を紹介するという実践を行った。11月に行われた秋の研究協議会では、県内からコメンテーターの先生方をお呼びし、本単元の授業をもとに、これからの小学校外国語教育について議論することができた。

また、3・4年複組では、総合的な学習の時間で取り組んでいる附属特別支援学校との交流と外国語活動の学習を関連付けた実践に挑戦した。自分たちが考えた英語を使ったゲームを通して、楽しそうに交流する子どもたちの姿が見られた。



(3) 小学1・2年生における「英語遊び」

「幼小中の12年間を見通した英語教育カリキュラム」の構築に向け、小学校低学年における「英語遊び」の授業を行った。子どもたちは、英語を使ったゲームや自己紹介などを楽しみながら、英語に慣れ親しむことができた。来年度も、3年生から始まる外国語活動とのつながりを意識しながら、指導内容やカリキュラムを更新していきたい。



(4) 幼稚園における「英語遊び」

1月、英語コーディネータが附属幼稚園を訪れ、年長組の子どもたちと一緒に「英語遊び」を行った。「遊びを通して英語に慣れ親しむ」をコンセプトに、幼稚園の子どもたちが、楽しみながら英語に触れることができるような活動を設定した。

2月には、年長組の子どもたちを附属小学校の外国語ルームに招待した。アルファベットを使ったゲームをしたり、好きなものを友達と伝え合ったりする活動を行った。



(5) 中学校との連携

今年度も、コーディネータが中学生の授業に参加したり、共同研究協力者として授業研究会に参加したりすることを通して、小中連携の新たな可能性について話し合うことができた。このように、小中を通して目指す子どもの姿について議論し、授業を見合ったり、一緒に授業づくりを行ったりしていくことが、小中連携において極めて重要であると考えている。そして、附属学校の小中連携の取り組みを、他校に広めていきたい。



(6) 県内の先生方に向けた講話

8月に三川町で行われた「田川地区外国語教育研修会」、11月に行われた「北村山地区外国語教育部会研修会」に講師として参加した。県内各地区の先生方に向けて、附属学校園におけるこれまでの外国語教育の取り組みについて発信することができた。



2 成果(○)と課題(▼)

- 公開研究会や各地区での講話などを通して、附属学校園における英語教育の取り組みを発信することができた一年だった。今後も「山形大学附属学校園の英語教育」の取り組みを県内外に発信していきたい。
- A L Tや山形大学の留学生とつながることで、子どもの「伝えたい」という気持ちを引き出すことができた。
- 幼小中の12年間を見通した英語教育カリキュラムの構築に向けて、附属幼稚園や附属特別支援学校、小学校低学年の子どもたちと連携した実践を行うことができた。
- Web会議システムや学習アプリの活用、動画撮影など、ICTを効果的に活用しながら授業づくりを行うことができた。
- ▼ 小中連携について、教員同士の連携に加え、子ども同士がつながることができる単元を構想し、その取り組みを他校に発信していきたい。

幼小連絡会 ねらいと年間計画

(1) ねらい

新1年生の学習や生活の様子を参観を通して、児童や学習活動の検討していきたい面や今後の課題について共通理解を図りながら、見通しをもつことができるようにする。

(2) 計 画

期 日	場所	窓口	内 容	附小担当	附幼担当
5月10日	附小	附小	第1回幼小連絡会 （附幼・一般） 1年生の児童の学習の様子を幼稚園教員が参観し、その後全体で話し合いをして情報交換をする。	教務	教務
11月22日	附幼	附幼	第2回幼小連絡会 小学校教員（1年担任・校長・教頭・教務・教務副・養護教諭）が幼稚園児の活動を参観し、それらをもとに幼小の学びや育ちについて共通理解を図る。	教務	教務
12月 7日	附小	附小	幼小交流会① 1年生のフェスティバルに年長児を招待し、参観してもらう。	大澤	山川
1月23日	附小	附小	幼小交流会② 生活科などの1年生の学習の様子を見学したり、一緒に活動に参加したりする。	大澤	山川
2月13日	附小	附小	幼小交流会③ 小学校の学習や生活について見学したり、一緒に活動に参加したりする。	大澤	山川
2月14日	附小	附小	第3回幼小連絡会 1年生並びに年長児に関わりある幼稚園担当が小学校1学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務	教務
2月20日	附小	附小	新入児情報交換会 （一般） 一般園の年長児に関わりある教員が1学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務	なし

※ 太枠は、附属連携に関するもの

第1回幼小連絡会 報告

- 1 ねらい 1年生の学校生活の様子をもとに、幼小ともに子どもたちへのよりよい支援のあり方を考える。
- 2 日時 令和4年5月10日（火）
- 3 場所 山形大学附属小学校 各教室・会議室
- 4 参加者 小学校・・・林校長・森山教頭・芦野教務・長岡副教務・鈴木養護教諭
1年生担任（大澤教諭・鈴木教諭・佐藤教諭）
幼稚園・・・伊藤園長・伊藤教務・奥山養護教諭
前年長児担任（伊藤教諭）・藤本特別支援コーディネータ
- 5 内容 (1) 小学校の学習参観 5月10日（火）2校時
(2) 協議会（16：00～17：00）
 - ① 新1年生の様子について
 - ・ 学年経営および新年度の学校生活について
 - ・ 学級の様子について
 - ② 今後の幼小連携について

話し合いの様子（一部抜粋）

【小学校より】

- ・ スタートカリキュラムを設定し、どの子にとっても安心して小学校生活が始められるように段階的に学習を工夫している。子どもたちは、園での学びを生かし、小学校でものびのびと生活している。初めての環境・初めて見ること、知ることにより喜びやたのしさを感じている。自分の思いを伝えたり、素直に受け止めたりすることができており、友達との関わりや学び合いへのエネルギーを感じる。

【幼稚園より】

- ・ 卒園した子どもが、下校中に手を振ったり少し遊んでいったりと、大切な園として関わっている姿がうれしい。園での遊びの積み重ねが、小学校での学びとつながっていると聞き、連携ができていることにうれしく感じている。また、個別支援が必要な子への対応も丁寧に取り組んでくれ、元気に楽しく生活できていることに感謝している。これからも情報交換を行いながら連携を図っていきたい。

6 成果と課題

- 園児のよさや特性を共有することで、個に応じた細かな対応が可能になり、それが安心した生活につながっていくと実感している。
- 幼稚園から小学校へと学びの場が変わっても、その子を囲む友達や教師が温かくかかわっている様子が参観を通してわかり、子どもたちの成長の様子を継続して捉えていくことができるという点で交流会や情報交換会は有意義な時間であると思う。

第2回幼小連絡会 報告

- 1 ねらい 小学校1年生の就学後の様子、年長児の育ちについて情報交換し合い、幼小連携を深める。
- 2 日時 令和4年11月22日（火）
- 3 場所 山形大学附属幼稚園 遊戯室
- 4 参加者 小学校・・・林校長・芦野教務・長岡副教務・鈴木養護教諭
1年生担任（大澤教諭・鈴木教諭・佐藤教諭）
幼稚園・・・伊藤園長・伊藤(恵)教諭・安藤教諭（3歳児担任）
伊藤(真)教諭（4歳児担任）山川教諭（5歳児担任）
奥山養護教諭・藤本特別支援コーディネータ
- 5 内容 (1) 幼稚園の保育参観 11月22日適時
(2) 協議会（15：30～16：30）
 - ・1年生の様子について
 - ・5歳児の様子について
 - ・幼小連携の充実に向けて（今後の交流活動の予定確認）

話し合いの様子（一部抜粋）

【小学校より】

- ・園での学びの様子を参観して、どの子も自分のこだわりをもって活動している様子が伝わってきた。遊びの中において、子どもは主体的であり、自分の生活をつながげながらその子なりの見方や考え方、発見をしていることが興味深かった。一見危ないと感じてしまう道具でも、使い方をスモールステップで学んでいき、必要に応じて安全に使用している姿に感心した。先生方が見守ってくださる中で、のびのびと自分らしさを発揮し、生活を楽しんでいる様子が伝わってきた。

【幼稚園より】

- ・遊びの中で、おもしろさを追究し、その子ならではの姿が見えてくる。また、遊びの中で友達と一緒に共有したり役割分担したりしながら関わる姿も見られる。楽しいときやそうでないときも、その子の思いに寄り添うようにして声をかけている。
- ・園児は多様なかかわり方を学び、身に付け生活している。それは相手を尊重するだけでなく、自分をも大切にすることにつながっていくと考える。

6 成果と課題

- 園児や児童の姿を見取り感じるだけでなく、幼稚園や小学校で、どのような学びの姿をめざして取り組んでいるのかを知ること、環境が変化しても、子どもの育ちを途切れることなく見つめ支えることができると感じた。
- 参観したり情報交換したりすることで、子どものよさや特性について具体的に話題にすることができ、個に応じた対応や有効な手立てについて話し合い、来年度へつなげることができると感じた。

幼稚園年長児と小学校第1学年児童との交流活動

1 ねらい

幼稚園

附属小学校1年生との交流活動を通して、小学校や1年生に親しみをもって関わり、入学後の生活や学習への期待感をもつ。

小学校

附属幼稚園の年長児との交流活動を通して、年長児の気持ちを考えながら行動したり、今年1年間の自分の成長を自覚したりする。また、特定の年長児とのかかわりを通して、具体的なかかわりに見通しをもったり、次年度のなかよしペアの活動への期待を高めたりする。





2 日時

- (1) 令和4年12月 7日(水) あおだもフェスティバル参観
- (2) 令和5年 1月23日(月) 交流活動(学校探検)・給食準備見学
- (3) 令和5年 2月13日(月) 学習参観・交流活動(クラス毎)

3 場所 附属小学校

4 参加者 附属幼稚園年長児17名、附属小学校第1学年児童101名

5 活動内容

<p>(1) あおだもフェスティバル参観 (12月 7日)</p>	<p>あおだもフェスティバルを開催し、1年生の「むかしばなし大しゅうごう～あつまれ!あおだものむら～」の劇を、体育館で年長児に見てもらった。劇の中に小学校でできるようになったことを発表する場面を入れ、小学校への見通しをもてるようにした。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
<p>(2) 学校探検 給食準備見学 (1月23日)</p>	<p>学校探検の活動を行い、年長児に学校の中のお気に入りの場所や知ってもらいたい場所について紹介した。その後、給食の準備から「いただきます。」の挨拶をすることで、ところまでの様子を見てもらい、給食の様子についての紹介を行った。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
<p>(3) 学習参観・学級毎の交流活動 (2月13日)</p>	<p>年長児に1組「算数」、2組「図工」3組「書写」の学習の様子を参観してもらった。その後、学級毎に交流会を開き、ゲームやクイズ、学校の行事紹介等を行った。</p>

6 成果（○）と課題（▼）

幼稚園

- 初めて小学校に行くということで、楽しみにしながらも緊張している様子が見られたが、体育館に入ると、1年生の素晴らしい姿に夢中になって観ていた。自分達も幼稚園でのフェスティバルを経験していたことから、「次は○○もしてみたい！」と目を輝かせながら鑑賞していた。大きな声でのびのびと表現する1年生の姿に、「あんなふうになりたい」という憧れを抱き、入学をますます楽しみにしている様子だった。
- 5～6人に分かれてそれぞれの教室に行ったときはとても緊張していたが、一緒に手をつなぎながら学校探検をしていく中で緊張もほぐれ、小学校への期待が膨らんでいた。小学校で給食準備を見学して「給食食べたい！」との声もあがり、小学校で調理してもらったものを幼稚園に運び、給食を食べたり配膳や片付けをしたりした。温かくて美味しい給食に喜ぶとともに、実際に経験してみることで、小学校での生活について見通しをもつきっかけとなったようである。

小学校

- フェスティバルでは、「小学校でできるようになることを発表の中に入れて伝えたいな。」「セリフの声を大きくしよう。」「どんな身振りだと劇を楽しんでもらえるかな。」等の年長児に対する気もちを子どもたちから引き出しながら劇づくりに向かうことができた。当日も、年長児が参観してくれることで、相手意識をもって演じることができた。
- 学校探検では、その子なりの理由をもってお気に入りの場所やお知らせしたい場所について選択し、年長児のことを考えながら案内するときの説明を考えることができた。案内中は、年長児と手をつないだり、教室に帰ってきた後は一緒に遊んだり自然な交流を通して仲を深めていく様子も見られた。また、給食準備見学では、はりきって自分の仕事に取り組む様子や、年長児に説明する様子が見られた。
- 年長児が来てくれることをたいへん楽しみにして、交流会に臨むことができた。2回目の交流会では、1回目の交流会の経験を生かし、より具体的にイメージをもって準備に向かうことができた。また、交流会を重ねることで、次年度、自分が「なかよしペアの2年生」として1年生と活動していく姿を思い描きながら活動に取り組む子どもの様子も見られた。

幼稚園児による中学校運動会参観

- 1 ねらい
幼稚園：年中児が年少児をリードしながら活動し、互いに親しみをもつようになる。
中学生のお兄さんお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。
- 2 日時 令和4年7月8日（金）
- 3 場所 山形大学附属中学校グラウンド
- 4 参加者 年少児うめ・もも組17名 年中児りんご組29名
引率：安藤・伊藤恵・伊藤真・奥山・山下・那須・小林
- 5 内容 中学校まで年少中ペアになって徒歩で往復し、運動会の様子を見て応援する。
- 6 次年度に向けて
年中児は、年少児の面倒をみながら中学校までの道を案内することで、上級生としての意識が芽生え、異年齢での関わりに期待感をもてるような出会いとしたい。また、中学生が運動会の各競技に熱心に取り組む様子を目の前にし、自然に声援を送り運動会を楽しむと共に、中学生に親近感をもちその後の家庭科の保育交流に繋げていきたい。

中学生による幼稚園運動会手伝い

- 1 ねらい
幼稚園：中学生のお兄さんやお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。
中学校：幼稚園運動会ボランティアを通して、幼児との関わりを学び主体的に運営を手伝う。
- 2 日時 令和4年9月17日（土） 8：30～12：00
- 3 場所 山形大学附属幼稚園
- 4 参加者 ボランティア希望の3年生 引率 教頭
- 5 内容 ・園児指導、世話 ・競技の試技、補助 ・道具などの準備、片付け
- 6 次年度に向けて
今年度は、コロナ渦のため、中学生のボランティア受け入れが叶わなかった。例年、中学生の園児に対する温かい対応や、競技運営への積極的な参加が見られ、運営する上でも貴重な人手となっている。また、園児と中学生の触れ合いだけに終わらず、保護者の方に附属学校園の最上級生である中学生の姿、その中学生と園児との交流を見ていただく貴重な機会となっている。来年度は、近年コロナ感染症拡大防止のため中止となっている中学校運動会の応援も再開し、幼稚園運動会への中学生ボランティアの参加を募り、中学生と園児との交流を重ね、子どもたち同士、また学校園間の連携の一つとして継続していきたい。

附属中学校授業・部活動参観

- 1 ねらい 6年生の児童が附属中学校の学習を参観したり部活動を見学したりすることで、中学校生活に対する心配や不安を軽減し、中学生活への期待をもつことができるようにする。

- 2 日時 10月26日(水) ※詳細は附属中学校の計画による。
14:10 附属中体育館に整列
14:20~15:10 授業参観
15:20~16:00 部活動見学 ※雨天時は部活動見学なし
16:00 終了

- 3 6年児童の動き
14:00 附属中学校へ移動
14:10 体育館に整列
14:20~14:45 学級ごとに全クラスを回る。
1組 1学年 → 2学年 → 3学年
2組 2学年 → 3学年 → 1学年
3組 3学年 → 1学年 → 2学年
14:45~15:10 自分の参観したい授業場所に行き、参観する。
15:20~16:00 部活動見学
自分の興味のある部活動を見学する。
16:00 中学校昇降口付近に集合 小学校に戻る。
16:15 下校



幼稚園と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1 ねらい

幼稚園

特別支援学校の友達や先生と一緒に遊び、親しみをもつようになる。

特別支援学校小学部

- (1)友達と活動する中で、他者と活動を共にする楽しさや役割が分かる。
- (2)友達と関わる中で、好きな活動を見付けたり伝え合ったりしながら共に活動する。
- (3)相手とよりよく関わりながら、自分から活動しようとする。

2 参加者

幼稚園 主に年長児 17名
特別支援学校 小学部1組（1、2年）児童 5名

3 日時、場所、内容

	日 時	場 所	内 容
第 1 回	6月20日（月） 6月21日（火） 10:00～11:15	幼稚園	「ともだちといっしょにあそぼう①」 ・自己紹介 ・園庭での自由遊び
第 2 回	1月26日（木） 10:00～11:15	特別支援学校	「ともだちといっしょにあそぼう②」 ・交流会 学習発表、遊びの紹介、ダンス、 自由遊び、感想発表 など
事前 事後 の 学 習	<p><幼稚園></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前学習として、特別支援学校の友達からのビデオレターをみんなで視聴し、交流の際に遊んだことを思い出したり、どんなことをして一緒に遊びたいかを話し合い、期待感が高まったり、交流への見通しをもつことに繋がるようにした。 ・保育者や友達と一緒に支援学校の友達と遊んだことを話し合ったり、写真を見ながら一緒に遊んで楽しかったことを思い出したりして、うれしかった気持ちや次回への期待を手紙で伝えるようにした。 <p><特別支援学校小学部></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前学習では、昨年度や前回の交流の様子を写真で見ながら、活動について見通しをもつ学習を設定した。また、幼稚園の友達に、簡単な手紙や動画を送ったり、学習でしている内容を伝えたりする活動を設定して、交流学習への期待を高めるようにした。 ・事後学習では、写真や動画を見ながら、交流学習の様子を振り返り、幼稚園の友達に向けて手紙を書いて自分の気持ちを伝えるようにした。 		

4 成果（○）と課題（▼）

幼稚園

- 最初の顔合わせの会で、特別支援学校の児童が、四つ切画用紙に名前や写真付きの好きな遊びをまとめて、見える化をしながら自己紹介をしてくれた。それにより、年長の子ども達が、交流後に手紙を返したときに、「○○の好きな○○さんでしょ」と、相手のことを思い出したり理解したりする手助けとなった。
- サーカスのできる広い場、観客席、泡遊びをできる十分な広さのテーブル、見ながらなぞることのできる適度な距離感の場（サーカス・泡遊び）のような環境設定があったので、いきなり当日に入っても、自然に遊びに入れることができていた。
- 2回目の交流前に「○○遊びがあるよ。一緒に遊ぼうね、待ってるよ。」という招待動画を送っていただいたことで、子ども達は「コマで遊べる」「風船楽しみ」と見通しを持って特別支援学校に向かうことができ、交流開始後すぐにそれぞれの遊びに入ることができた。また、コマや風船といったモノを媒介にして、年長児と支援学校の子どもたちとがお互いに関わりを持ちながら遊ぶ姿も見られ、一気に親近感が湧き、心の距離感が縮まったように感じた。
- ▼一緒に同じ場において、同じような遊びをしているが、もっとお互いにやりとりが生まれるようなしかけをしていくことも必要だと思われる。

特別支援学校小学部

- 第1回目は、本校児童が幼稚園を訪問し交流学習を実施した。交流の始まりにお互いに名前や好きなことを紹介する時間を設定したことで、園庭での遊びが、一人遊びにならず、友達がしている遊びに影響を受けて遊ぶ様子が見られた。虫などの生き物を捕まえたり、踊りを踊ったりしながら、幼稚園の友達と自然に関わり合って交流する場面も多く見られた。
- 第2回目は、特別支援学校で交流会を実施した。本校児童が教師と一緒に交流会を進め、これまでの学習で取り組んだ風船遊びやコマ回しをしたり、一緒に踊ったりした。普段自分たちがしている遊びを一緒にすることで、自然に関わり合って活動できた。また、交流会に向けて、役割を分担したり練習したりすることで、自分の役割や活動に見通しをもって活動できた。
- 今年度は、年長児を中心に交流学習を実施した。そのため、双方がお互いを意識しながら影響を受けて、やり取りしながら遊んだり、発表したりできた。
- ▼児童によっては、園庭での遊びが日常の遊びと同じようになり、相手を意識した活動になりにくい場面も見られた。交流及び共同学習のねらいに立ち返りながら、異学年集団との交流会の在り方について検討し、双方の幼児児童にとって、経験や人間関係を広げることのできる交流及び共同学習となるようにしていきたい。



幼稚園と特別支援学校高等部の交流及び共同学習

1 ねらい

幼稚園

- (1) 買い物、作業見学を通して、特別支援学校高等部の生徒と触れあい、親しみをもつ。
- (2) いろいろな製品の中から100円以内で自分の買いたい物を選んで買う。

特別支援学校

- (1) 周りの状況に合わせて活動したり、自分の役割を工夫したりして、販売活動に取り組む。

2 日時 令和5年2月7日(火) 9:45~10:50

3 場所 山形大学附属幼稚園 遊戯室

4 参加者 附属幼稚園 年中児 29名、 附属特別支援学校 1、2、3年生 20名

5 内容

- (1) 高等部作業学習で製作した製品の販売と購入。
- (2) 幼稚園で使用しているベンチなど作業製品のメンテナンスと作業の見学。

6 成果(○)と課題(▼)

幼稚園

○園児にとって、自分でお金を握りしめ、欲しい物を選択して買い物をする経験は本当に貴重なことである。自分のため、家族のためを思って買い物する姿は微笑ましく、高等部の先生方、生徒の皆さんの温かな対応や心配りのおかげで、のびのびと買い物を楽しませてもらった。事前に案内の文書やチラシが配られていたため、買い物メモを書いてきたり、バザーの経験がある兄姉から「これを買ってきて」とお願いされたり、家族みんなで期待を膨らませていたようである。

○幼稚園で使用しているベンチなどを修繕の様子を見せてもらい、修繕の済んだベンチを触ってみたり座ってみたりして、「気持ちいい」と喜んでた。生徒さんの姿に憧れをもち、終了後、保育室で木製中型積み木とトンカチで工事ごっこをする姿も見られた。

○幼稚園遊戯室が会場だったため、年中児だけではなく年少児・年長児も修繕の様子やバザーの品物を見ることができた。また、保護者向けの販売もあり、「何買った？」などと家庭での会話も弾んだようである。

▼昨年度より園児数が増えたため、買い物にやや時間がかかった。来年度の年中児は今年度より減るため、人数に応じた時間設定が必要かもしれない。

特別支援学校

○幼稚園でバザーをすることを楽しみにしながら、事前の準備を行い当日を迎えることができた。事前学習では、園児が欲しいと思う物を考えながら製品のアイデアを出し合った。園児に合った大きさやデザインを考えて製作したり、楽しみながら買い物をしてもらえるようにくじ引きにしたりする等、製作や販売の仕方を工夫しながら準備に取り組むことができた。

○当日のバザーでは、木工、紙工、縫製グループともに、小さな園児と目線を合わせて製品について紹介する姿や、園児の行動に合わせてお釣りを差し出す姿、優しく製品を受け渡しする姿等、相手を気遣いながら関わる姿が多く見られた。

○製品のメンテナンスでは、幼稚園で使用しているベンチ等の製品を園児達から受け取り、目の前で作業することで、堂々と自信をもって取り組む姿も見られた。



小学校と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1 ねらい

小学校

ペアの児童とともに活動する中で、気持ちや考えを感じ取ろうとしたり、伝えたりすることを通して、相互理解の素地を育てる。

特別支援学校小学部

- (1) 附属小学校の児童と活動する中で、活動を共にする楽しさや必要なことが分かる。
- (2) 附属小学校の児童と気持ちや考えを伝え合っ、選択や決定しながら共に活動する。
- (3) 附属小学校児童と様々な活動を通して、相手とよりよく関わりながら、自分の考えを深めようとする。

2 参加者

小学校 複式学級 3、4 年児童	12 名
特別支援学校 小学部 3～6 年児童	11 名

3 日時、場所、内容

	日 時	場 所	内 容
第 1 回	5月31日(火) 10:25 ～11:30	特別支援学校	「ともだちをしよう①」 ・学級ごとの自己紹介 ・ペアの児童同士の顔合わせ、自由遊び
第 2 回	6月16日(木) 10:25 ～11:30	特別支援学校	「ともだちをしよう②」 ・リズムダンス、振り付きの英語の歌の発表 ・ペアの児童同士での自由遊び
第 3 回	10月 6日(木) 10:25 ～11:30	特別支援学校	「ともだちとなかよくなる①」 ・小学校児童が考えた企画の遊び ・児童同士での自由遊び
第 4 回	12月15日(木) 10:25 ～11:45	特別支援学校	「ともだちとなかよくなる②」 ・小学校児童が考えた企画の遊び、踊りの発表 ・児童同士での自由遊び
第 5 回	1月19日(木) 10:25 ～11:45	特別支援学校	「ともだちとのかかわりをふりかえろう」 ・音楽の発表 ・児童同士での自由遊び ・振り返り
事前事後の学習	<p><小学校></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前学習として、昨年度作ったペアの「好きなこと」や「仲よくなるコツ」を書いた「ペアブック」を読む時間を設けた。また、4年生の昨年度の経験を共有し、活動への期待感と見通しを持つことができるようにした。 ・毎回の振り返りを書き溜め、次回の交流に活かせるよう計画を立てた。 <p><特別支援学校小学部></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前学習として、ペアの友達や前回の活動の様子の写真を見ながら交流会について確認した。また、ペアの友達からの手紙や動画を見て、活動の見通しを持ち交流学習への期待感を高めたりした。 ・事後学習では、写真を見ながら交流学習で楽しかったことなどについて振り返り、ペアの友達に向けた手紙を書いて気持ちを表した。 		

4 成果（○）と課題（▼）

小学校

- 3年生にとっては、初めての交流である。「一緒に遊ぶ」「自分も楽しむ」を大切にしながら最初の交流に臨んだ。4年生は、昨年度の経験を活かし、「また会える。」という期待感をもって交流に臨んだ。回を重ねると、声、表情、仕草など、様々な表現を受け取り、どう関わればよいのかを考えるようになってきた。
- ペアの思いを受け止めようとする優しさと、自分の思いを伝えようとする意識の中での葛藤が見られた。交流を通して、ペアとよりよい関わりをしようとする中で、自分が今の状況をどうとらえ、どう行動するかを考えるきっかけとなった。
- 自由遊び、企画交流ともに、「一緒にする」「相手に届ける」という思いで臨んだ。「とき」を共有するので、どうすればいい時間を過ごせるかを考え、計画を立てる姿が見られた。また、相手のことを知るにつれて、「自分のペアは」「自分の学級は」という意識が育ってきた。その意識が、ペアや学級に応じて、動画撮影や手紙交換をする際に、伝え方や書き方などの細部にまで目を向けようとする姿勢につながった。
- 交流が、教科や特別活動の学びを活かす機会となった。今年度は、外国語を用いてコミュニケーションをとったり、音楽やダンスを披露したりした。コロナ禍の中、複組の児童にとっては、保護者以外に学習の成果を見てもらえる、貴重な体験となった。
- ▼ICTの活用により、交流前に動画を使っての予告配信が可能になった。しかし、動画配信は手紙と比べて、何度も撮り直せる簡便さがある。ゆえに、何を、どう伝えるかと言葉を吟味しようとするよりも、配信自体が目的となってしまった。
- ※今年度で小学校は、複式学級が閉級する。閉級に伴い、子どもたちは、最後の交流会をよりよいものにしようという意識で、毎回の交流に臨んでいた。来年度以降は、交流会が続いたとしても、ペアの関係でのかかわりは難しいだろう。今後、ねらいを検討し、双方の児童にとってよりよい関わりが生まれる機会になるために、どのような交流の在り方が望ましいのかを模索していきたい。

特別支援学校小学部

- 全5回の交流会のうち、1・2回目は、小学校のペアの友達を覚えるねらいから、自己紹介の他、学習で踊っているダンスや自由遊びといった流れで活動した。自由遊びでは、本校児童が普段しているボール遊びや、学習でしている活動などを取り入れることで、ペアの友達との遊びや関わりに自然と発展するきっかけになった。
- 3回目の交流会からは、小学校の児童が企画した遊びを取り入れて活動した。どの企画遊びも、小学校児童が本校児童と一緒に楽しめるように考えた内容になっており、お互いに試行錯誤しながらも楽しむ様子が見られた。学習で取り組んだ英語ソングや音楽発表などもあり、普段の学習を知ることもできた。
- 新型コロナウイルスの影響もあったが、活動方法や内容について検討し、計画通りに5回実施することができた。事前・事後学習に手紙のやり取りの他に、動画でのやり取りや小学校からの活動紹介をしたことで、直接交流する場面において、友達の名前や顔を覚えて自然な関わりにつながった。
- ▼コロナ禍により、今年度も活動内容や活動場所を一部制限するなど、感染対策したうえで交流学習実施となった。特別活動の、特に交流及び共同学習のねらいに立ち返りながら、インクルーシブ教育を意識した交流学習の在り方について検討し、双方の児童にとって経験を広げたり、社会性や豊かな人間性を育んだりすることのできる交流及び共同学習となるようにしていきたい。



附属中学校と附属特別支援学校中学部の交流及び共同学習

1 ねらい 中学校

- (1) 附属特別支援学校の生徒との共同活動を通して、豊かな人間性を育み、尊重しながら協働していく大切さを知る。
- (2) 附属特別支援学校の生徒と一緒に体を動かす中で、互いに教え合ったり認め合ったりしながら、共に活動することの楽しさを知って主体的に関わろうとする気持ちを育てる。

特別支援学校中学部

- (1) 附属中学校の生徒と活動する中で、相手のことを知ったり、活動を共にする楽しさや必要なことが分かったりする。
- (2) 附属中学校の生徒と一緒に体を動かす楽しさや喜びを感じたり、動きを通して感じたことを相手に伝えたり、相手から聞いたりするなどのやり取りをしながら共に活動する。
- (3) 同年代の友達と一緒に活動する楽しさを感じながら、相手に関心をもったり自分からかかわろうとしたりする。

2 日 時

令和4年12月16日(金) 10:50～11:40

3 場 所

附属中学校 体育館

4 参加生徒

中学校 1年1組生徒 33名
特別支援学校 中学部生徒 17名

5 活動内容

事前事後の学習	<p><中学校></p> <ul style="list-style-type: none">・事前学習では、主体的に附特の生徒と交流学習を展開するために、本時の見通しをもたせた。また、ノーマライゼーションの話から、共に学び協働することの意義について考えるとともに、自己紹介カードの作成や関わる時に大切にしたいことを話し合った。・事後学習では、附特の生徒が記入してくれたメッセージカードを受け取り、どのように感じたのかを知ったうえで、活動を振り返った。 <p><特別支援学校中学部></p> <ul style="list-style-type: none">・事前学習として、附属中学校の生徒とかかわるためにどのようなことができるかを考える時間を設定した。生徒から意見の出た自己紹介を事前に動画で撮影し、附属中学校に届け、自分達のことを知ってもらったり、活動案を聞いてダンスやゲームを実際にやってみたりして、交流学習への期待感を高めた。また、交流学習で、どのようにかかわりたいか目標を明確にして臨んだ。・事後学習では、写真を見ながら交流学習でグループの友達とかかわって感じた事を振り返り、メッセージカードに書いて気持ちを表した。
---------	---

当日の学習

保健体育をととした交流学習

- ・ウォーミングアップ（エアロビクス）
- ・体ほぐし運動（開脚じゃんけん、片足しりとり、あんたがたどこさ）
- ・よきこいソーラン

6 成果（○）と課題（▼）

中学校

- 当初は、「自分よりも年上の人がいる」「どう関わっていけばいいだろう」と、不安な声が聞かれていたが、当日は自己紹介カードを使って自分から話をしている生徒が多く見られた。グループ活動では、言葉を選びながら話をしている姿勢から、相手のことを考えて活動内容を伝えようとする意思を感じた。
- 交流活動を通して、主体的に関わろうとする姿や最後まで頷きながら話に耳を傾けようとする姿が見られ、事前学習で確認した協働的な学びに対する意識を感じることができた。附特の生徒との関わりから、様々な違いや個性を感じるとともに、自分自身を深く見つめ直すきっかけにもなったのではないかと思う。今回のような経験の積み重ねが人との付き合い方の学びとなり、今後の社会生活にも繋がっていくことが期待できる。
- ▼1学級のみだったため、学年全体で関わることができなかつたのが残念だった。各校の実情から容易にはできないが、学級ごとに異なる教科で交流を試みる等、幅広い交流学習の展開も今後検討していければと思う。そうすることで、他教科での関わり方との違いや共通する部分を学ぶことができ、それらを学年間で共有できれば、より多くの生徒がインクルーシブ教育に触れることができるのではないかと考える。

特別支援学校中学部

- 同世代の生徒とのかかわり方や相手を知りかかわる楽しさを知るねらいから、自己紹介をしたり、学習で踊っているダンスや体を使ったゲームなどを行ったりする活動を行った。小グループで活動したことで、同じグループの友達の名前を覚えるなど友達に関心をもったり、自信をもって学習したダンスを友達に紹介したりするなど、主体的に関わる姿が多く見られた。
- 新型コロナウイルスの影響で、実施できない年が続いたが、活動内容や活動方法について検討し、直接交流することができた。
- ▼年度が始まってからの計画だったため、活動時期や活動内容について双方で調整が難しいことがあった。また、今年度の交流学習で同世代の生徒と活動を共にし、かかわる経験はできたが、これまで、一度限りの交流となっていた。インクルーシブ教育を意識し、双方の生徒にとって経験を広げたり、社会性や豊かな人間性を育んだりすることのできる交流及び共同学習ができるようにしていきたい。



Ⅱ 山形大学附属学校 研究・連携推進委員会規程

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程

平成28年4月1日

(設置)

第1条 山形大学附属学校運営規程第8条の規定に基づく附属学校運営会議の専門委員会として、山形大学附属学校研究・連携推進委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(目的)

第2条 委員会は、附属学校における研究を推進し、かつ、附属学校間の連携を推進することを目的とする。

(審議事項)

第3条 委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 大学と各附属学校とが連携した教育研究及び実証の推進に関する事項
- (2) 公開研究会及び大学と各附属学校との共同研究に関する事項
- (3) 附属学校間の連携の基本的方針に関する事項
- (4) 附属学校合同研修会に関する事項
- (5) 幼小連絡会及び小中連絡会に関する事項
- (6) その他前条に規定する目的を達成するために必要な事項

(組織)

第4条 委員会は、次に掲げる委員で組織する。

- (1) 附属学校運営部長
- (2) 附属学校運営副部長(研究担当)
- (3) 附属学校運営副部長(教育実習担当)
- (4) 主担当教員として地域教育文化学部配置された教員の中から選出された者 3人
- (5) 主担当教員として大学院教育実践研究科に配置された教員の中から選出された者 1人
- (6) 附属学校の校長(幼稚園にあっては園長。以下「附属学校長」という。)
- (7) 附属学校の教頭
- (8) 各附属学校研究部長
- (9) その他委員会が必要と認める者

2 前項の第4号、第5号及び第9号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、前条第1項第1号に掲げる委員をもって充てる。

2 委員長は会務を掌理し、委員会を代表する。

3 委員長に事故があるときには、前条第1項第2号に掲げる委員がその職務を代理する。

(会議)

第6条 委員会は、委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開き、議決することができない。
- 3 委員会の議事は、会議に出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。
- 4 前項の場合において、委員長は、委員として議決に加わることができない。
- 5 委員長は、審議結果を山形大学附属学校運営会議に報告しなければならない。

(部会)

第7条 委員会の下に、次の3つの部会を置く。各部会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

(1) 共同研究推進部会

大学と附属学校の共同研究について計画し、実施する。

(2) 幼・小・中連携部会

附属幼稚園、附属小学校及び附属中学校の連携について計画し、実施する。

(3) 特別支援連携部会

附属特別支援学校とその他附属学校の連携について計画し、実施する。

(事務局)

第8条 委員会に事務局を置く。事務局は各附属学校の教頭が持ち回りで担当し、委員会運営に必要な庶務を行う。

(その他)

第9条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

- 1 この規程は、平成28年4月1日から施行する。
- 2 次の規則は、廃止する。
 - (1) 山形大学附属学校研究推進委員会規則(平成17年3月7日制定)
 - (2) 山形大学附属学校連携委員会規則(平成21年6月1日制定)

Ⅲ 資 料

研究・連携推進委員会規程第7条に定める部会に関する申合せ

平成31年4月24日
附属学校研究・連携推進委員会

1 目的

この申合せは、山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める「共同研究推進部会」、「幼・小・中連携部会」及び「特別支援連携部会」の各部会の運営について、必要な事項を定めるものとする。

2-1 共同研究推進部会

(1) 大学と附属学校の共同研究を推進することを目的とし、大学教員及び附属学校教員で構成する。

(2) 共同研究推進部会は、次の研究部会で構成する。

国語教育	社会科教育	算数・数学教育
理科教育	音楽教育	造形美術教育
保健体育教育	家政教育	外国語教育
幼児教育	道德教育	生活科教育
特別支援教育	養護	学校外教育
I C T教育	インクルーシブ教育	英語教育
SDG sを踏まえた教育		

(3) 研究部会への所属については、原則として年度初めに附属学校研究・連携推進委員会において確認する。所属確認は、附属学校教員または大学の同部会員の推薦と本人の同意に基づいて行う。

(4) 地域教育文化学部及び教育実践研究科の教員はいずれかの研究部会に積極的に所属するものとする。附属学校教員は、原則としていずれかの研究部会に所属するものとする。地域教育文化学部以外の教員についても、研究部会員の推薦に基づいて研究部会に所属することができる。

(5) 各研究部会は2人以上で構成し、各研究部会に大学教員の中から選出した部会長1人を置く。

ただし、I C T教育、インクルーシブ教育、英語教育及びSDG sを踏まえた教育の研究部会にあっては、附属学校教員の中から選出した部会長1人を置くものとする。

(6) 研究部会の設置及び改廃等に関する事項は、附属学校研究・連携推進委員会において決定する。

(7) 各研究部会は、年度当初に研究テーマを決定の上共同研究を行い、年度末に附属学校研究・連携推進委員会に研究結果報告を行うものとする。各研究部会の研究テーマは、各附属学校の公開研究会のテーマと関連した研究テーマや、他の主体的研究テーマとする。

- (8) 研究部会に所属する大学教員は、各附属学校の公開研究会において、指導助言者ではなく、共同研究者として積極的な役割を果たすものとする。

2-2 幼・小・中連携部会

- (1) 附属幼稚園，附属小学校，附属中学校の連携について具体的に計画し，実施することを目的とする。
- (2) 幼・小・中連携部会は，附属学校運営副部長（2人），学部選出の研究・連携推進委員会委員（1人），幼・小・中の各教務主任（3人），コーディネータ（3人），各研究部長（4人）で構成する。
- ※座長は，研究担当の附属学校運営副部長が務める。
- (3) 部会の開催は，議題に応じて，次の方法のいずれかとする。
- (a) 研究・連携推進委員会と同日開催（研究・連携推進委員会終了後に開催）
- (b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催（幼・小・中連携部会+特別支援連携部会の連続開催）
- (c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催
- (4) 附属小学校を主幹校とし，作業部会の議題の整理，会議の案内，進行等を務めるものとする。

2-3 特別支援連携部会

- (1) 附属特別支援学校と幼・小・中との連携について具体的に計画し，実施することを目的とする。
- (2) 特別支援連携部会は，附属学校運営副部長（2人），学部選出の研究・連携推進委員会委員（1人），幼・小・中・特の各教務主任（4人），コーディネータ（3人），各研究部長（4人）で構成する。
- ※座長は，研究担当の附属学校運営副部長が務める。
- (3) 部会の開催は，議題に応じて，次の方法のいずれかとする。
- (a) 研究・連携推進委員会と同日開催（研究・連携推進委員会終了後に開催）
- (b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催（幼・小・中連携部会+特別支援連携部会の連続開催）
- (c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催
- (4) 特別支援学校を主幹校とし，作業部会の議題の整理，会議の案内，進行等を務めるものとする。

附 則

この申合せは，平成31年4月24日から施行する。

附 則

この申合せは，令和4年4月1日から施行する。

山形大学附属学校研究・連携推進委員会委員名簿

(令和4年4月1日現在)

	氏 名	現 職
委員長（1号委員）	三 浦 登志一	（附属学校運営部長）
委 員（2号委員）	笹 瀬 雅 史	（附属学校運営副部長）
委 員（3号委員）	加 藤 健 司	（附属学校運営副部長）
委 員（4号委員）	佐 川 馨	（地域教育文化学部教授）
	坂 本 明 美	（地域教育文化学部准教授）
	坂 喜 美 佳	（地域教育文化学部准教授）
委 員（5号委員）	石 崎 貴 士	（大学院教育実践研究科教授）
委 員（6号委員）	伊 藤 顕 吾	（附属幼稚園長）
	林 敏 幸	（附属小学校長）
	早 坂 智	（附属中学校長）
	川 田 栄 治	（附属特別支援学校長）
委 員（7号委員）	森 山 謙 一	（附属小学校教頭）
	森 本 真 紀	（附属中学校教頭）
	片 桐 睦	（附属特別支援学校教頭）
委 員（8号委員）	伊 藤 真由美	（附属幼稚園研究主任）
	神 保 諒 一	（附属小学校研究部長）
	大 隅 一 浩	（附属中学校研究部長）
	柴 田 雄一郎	（附属特別支援学校研究主任）
委 員（9号委員）	伊 藤 恵里奈	（附属幼稚園教務主任）
	芦 野 繁 樹	（附属小学校教務主任）
	金 澤 彰 裕	（附属中学校教務主任）
	近 藤 真知子	（附属特別支援学校教務主任）
	藤 本 沙 織	（特別支援教育コーディネータ）
	千 葉 久美子	（メンタルケアコーディネータ）
	佐 藤 大 将	（英語教育コーディネータ）

※4号，5号及び9号委員の任期は2年（R4.4.1～R6.3.31）

編集後記

コロナ禍3年目である今年度も、いくつかの活動が中止や縮小することとなった。計画していた活動を実施することができず、例年、本報告書に記載されていた実践の中で、今年度、報告できなかったものもある。そのような状況下であったが、4校園で知恵を出し合いながら連携活動の充実を図ろうとしたことも事実である。昨年度と比較して、オンラインの活用や活動内容の工夫など、多くの連携活動に変化が見られた。

また、附属学校園の第4期中期目標・中期計画の柱となる4つのプロジェクトチーム（ICT活用、インクルーシブ教育、英語教育、SDGsを踏まえた教育）の充実を図った1年でもあった。しかし、チームによって連携の機会の多少など、若干の温度差も見られた。来年度以降の取り組みに期待したい。

今後も、幼小中特の4つの校種の個性と、附属学校園としての連携できる強みを生かし、附属学校園の子どもたちに未来につながる学びを提供するとともに、地域にとって意義ある教育実践を提案していきたい。

令和4年度 附属学校研究・連携推進委員会事務局
附属特別支援学校 教頭 片桐 睦

令和4年度

附属学校連携活動報告書

発行日 令和5年3月31日

発行者 山形大学

編集者 山形大学附属学校連携委員会

〒990-0023

山形市松波2丁目7番2号